
人魚が見た碧 ムラサキの雲の その先へ

橘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚が見た碧 ムラサキの雲の その先へ

【Nコード】

N0711T

【作者名】

橘

【あらすじ】

第9話あたりをベースに、杏子視点で語られる、魔女になったさやかへの想い。

目の前にいるのは、鋼鉄と音楽と、呪いの化身。

これはもうあいつじゃない。そう思っても、そこかしこに残された、あいつの名残があたしを苦しめる。

あいつの剣。あいつのマント。そして、あいつの大好きだった、あの坊や。

こいつは永遠に、この閉じられた世界で、自分が生み出した影の演奏で自分を慰め続けるのだろう。

ねえ、さやか。あんた、こんな結末で良かったのかい？

「話がある」

あたしがそう言うと、暁美ほむらは無言であたしを部屋に招き入れた。

部屋といっても、ちゃんとしたダイニングキッチンに、独立した部屋があつて、独り暮らし用の物件では無いのだろう。けれど、そこにはほむら以外に人間の気配はない。

ほむらの後に続いてダイニングキッチンを抜けると、これまた広い部屋に出た。リビングなのか、こいつの自室なのかは良く分からない。不気味な程に生活感の無い部屋。

「で？ 話って何？ 佐倉杏子」

振り向いたほむらの長い髪が大きく弧を描く。

あたしはそれにすぐには答えず、ソファにどかりと座り込む。そして上目遣いにほむらを睨み付ける。

「……あんたの言う穏便は分かった。だからあんたはもう、さやかに関わるな」

ほむらはあたしの言葉に構わず、ゆっくりとあたしの対面に座った。

「それは、貴女が美樹さやかを始末する、ということかしら」
その冷淡な言葉にあたしは顔をしかめる。

「あたしが無理やりにもあいつのソウルジェムを浄化するって言うてんだ」

「出来るの？ どうやって？」

「あ？ そりゃ、あいつをとっ捕まえて」

「それから？」

「え？」

ほむらの思いもかけない言葉に、あたしは素っ頓狂な声を上げる。

「それからどうするの？ たとえ、今浄化しても、数日もしないう

ちにあの子のソウルジェムは真っ黒になる」

「そしたら、またあたしが」

「その次は？」

「……その次だって……」

「貴女は美樹さやかに付きつきりなの？ 二十四時間三百六十五日、彼女が死ぬまで」

「……」

「貴女は美樹さやかの体の自由を止めることが出来るかもしれないけれど、美樹さやかの呪いを止めることは誰にも出来ない。違う？」

あたしは反論できず、下を向いて黙り込む。

「……そんなに美樹さやかが大事なの？」

その言葉に、あたしは再び顔を上げた。眼前のほむらは相変わらずの無表情。

「この間会ったばかりの人間じゃない？ そんな人間がどうなるかと貴女には何も関係ないはずよ」

確かにその通りだった。

「まあね。でもさ……」

あたしは視線を足元に移し、口角をゆっくりと持ち上げる。

「あいつさ、ちょっとあたしに似てるんだよ。だからかな、あいつがおかしくなっていくのを見たくない」

「貴女からそんな殊勝な言葉を聞けるとは思わなかったわ」

「ハッ、そんなカツコいいもんじゃねえよ」

「馬鹿にしてるわけじゃないのよ。むしろ、安心したわ」

思ってもみなかった言葉に、あたしは再びほむらに顔を向けた。

そのときのほむらの目は、とても優しくかった。

ほむらは立ち上がって窓に向かって歩き出す。

「なら、貴女にあの子を任せるわ。でも、貴女の手になんか負えなくなったら、その時は」

「わかってるって。そうならないようにするからさ。ちょっとくらいあたしを信用してくれよ」

あたしはそう言くと、部屋をあとにする。

ドアを閉めようとした時、ほむらが言った言葉が耳に残った。

「あの子を救えることを、祈っておくわ」

ほむらのマンションを出て、夜道を一人。歩きながら、あたしはさっきの会話を思い出した。

「あの子を救う、ねえ」

違うんだ。別にあたしがさやかを救いたいんじゃない。

あたしが、さやかに救われたかったんだ。

あたしは色んな事が嫌になっただけ。
いつからだろう。自分の人生が既に終わっていると気付いたのはいつだったのだろうか。あたしが決定的に人生を誤ってしまったのは。

親父も母さんも、妹もみんな死んで。お金も、頼る親類も何も無くて。

そうして入った施設は、意外にもみんな優しくかったように思う。
あたしより小さな子供もいれば、年上の人もいて。あたしもみんな

の中に溶け込めるように努力した。

けれど、みんなに溶け込めば溶け込むほど、自分が他の子と違うことを思い知らされた。

昼は普通に学校へ行き、夜は施設のみんなで助け合って生活する。そんな中、あたしだけが魔法少女として魔女を狩りに行く。

最初は、これも施設のみんなのためだと誇らしく思っていた。けれど、あたしがどんな痛い思いをして戻っても、誰も気付いてくれない。

何故、あたしだけが他の子よりも苦しい思いをしなければならぬのか。あたしだって施設の子たちと同じ生活をしてもいいはずなのに。夜が来れば、無防備にベットで眠りたいのに。こそこそと施設を抜けだしたりなんかしたくないのに。どうして、あたしだけ？ 一度、肝心なところだけぼやかして、施設の先生に相談したことがある。

「辛いでしょうけど、その辛さを他人と比べては駄目。他人にはそれぞれの辛いことがあるし、その感じ方もそれぞれ違っていろいろの時、あたしの中で何かが切れた。」

あ、あたしはここに居るべきじゃない。

多分、ここがあたしの人生のもう一つのターニングポイントだったと思う。あたしが契約した時とどちらがより致命的だったのだろうか。

施設から持ち出したお金も底をついてしまっていた。もう、おにぎり一個だって買えやしない。あたしみたいな中学生が、何処かに泊るのも、コンビニやファストフードのお店で夜を明かすのも難しかった。何度も施設に戻ろうと思ったけれど、お金を盗んだこともあるし、戻るに戻れなかった。

援助交際でもするか、野垂れ死ぬか。どっちがいいかな？

そう思った時、ポケットに入れたソウルジェムに気が付いた。あ

あ、魔法でも使えばどうにかなるかな？

果たして、魔法で食べ物も何も生み出すことは出来なかった。けれど、魔法を使えば、食べ物も着るものも、住む所だって手に入れることが出来た。もちろん、あたしだってことがバレることなく。

それから生活が一変した。

いい子の振りをする必要なんてなくなった。あたしは自分一人で生きていけることに気付いたから。もう、誰にも束縛なんかされない。欲しいものは大体手に入るし、ふかふかのベッドで眠ることだって出来た。自由だった。

だけど、あたしは気付いてた。自由を手にした分、未来を失ったことを。もう、普通の高校生にも大学生にも、社会人にもなれない。街を行くセーラー服やブレザー姿の、あたしと同じくらいの年の女の子を見るたび、どうしようもなく悲しくなった。

あたしは死ぬまで、こうやって盗みを続けていくしかない。魔法を使うために魔女を倒して、その魔法で盗みをして、その日その日を生きていく。ただ、その繰り返し。

あたしにはもう、善悪の判断も生きていることと死んでいることの区別も付かなくなっていた。

死ぬのは嫌だった。あたしを置いて死んでいった親父たちの後を追っているような気がするから。でも生きるのも嫌だった。嫌というよりも無意味だと思った。

だからだろうか？ さやかが契約の時に望んだこと。そして、その結果あいつに訪れた不幸。それを知った時、あたしは胸が温かくなつたのを感じたのは。

こいつなら、あたしのこと少しは分かってくれるかもしれない。

それから、あいつのことをずっと見てた。そして、あいつの行動全てに苛立った。どうしてそんなに要領が悪いのか。間違い方は違うけれど、あいつもあたしと同じように間違いを繰り返す。それが歯痒かった。

あたしは何度もあいつに警告した。

「あんたさあ、頭悪いのもいい加減にしてくれる？ ヒヨコを絞めても卵は得られないって、言ったでしょ？ 別に、魔女が居る居ないに関わらず、人は死ぬし、犯罪は起きる。だから、あんたが何しようと世界には関係無いの」

「うるっさい。私はあんたとは違うんだ」

「あの坊やの手を治して、褒められたかったの？ 『さやか、有難うね』ってさ。無理だよ。坊やの手が治ることと、坊やに必要とされることは関係無いんだよ」

「黙れ……」

「あんたが必要とされたいものはみんな、あんたのことなんてこれっぽちも見えてないんだよ。あんたなんか居なくても」

「黙れえ！」

悲しかった。さやかに罵られることよりも、さやかに刺されることよりも、こんな言い方しか出来ない自分が、悲しかった。

あんたが必要とされたいものが、どんなにあんたのことを見てなくても、あたしはあんたのこと見てる。あんたのこと、必要としてる。だから、さやか。あたしを見てよ。あたしを必要としてよ。

頭の中ではいくらでも言えるのに、口に出せない自分が憎くて堪らなかった。

「世話、掛けたね」

さやかと最後に会った夜。さやかは明らかに憔悴していた。

細かく震える小さな体。強く抱き締めるやりたいと思った。そう

することで、さやかの苦しみを少しでも受け止めることが出来たなら。

さやかの苦しみをわかってあげられるのは、あたしだけ。あたしの苦しみをわかってもらえるのも、さやかだけ。自惚れかもしれないけど、そう間違っではないだろ？

さやかと一緒になら、この下らない世界でも生きていける気がする。あたしの人生がどんなに醜くても、さやかが苦しまず生きていくことが出来たら、それでいい。あたしはさやかに必要とさえされれば、それでいい。

あたしはさやかに手を伸ばす。

と同時に、さやかがあたしの方を向いた。

流れる涙がとても綺麗だったので。

抱き締めるのが一瞬遅れた。

あいつの車輪が側頭部をしたたか打つ。

血がだらだらと垂れてきて、あたしの視界を奪う。

やっぱ、駄目だったか。そうだよな、そんな上手くいかないよな。まどかを守りながら戦ってたからだろう。消耗が激しい。まだ、まともにもやりあっても勝てる自信はあるけど。

「苦しませたくは、ないな」

さやかは十分苦しんだ。馬鹿が馬鹿なりに一生懸命悩んで、こんな結果になってしまったけれど、せめて最期くらいは楽に終わらせてやりたい。

「となると、これしかないか」

あたしは胸の紅い宝石に手を当てる。ソウルジェム。あたしの魔力、あたしの命の結晶。

さやかも、バママも、きっとほむらも知らない、あたしの切り札。あたしの魔力全て使えば、この結界の全てを一瞬で焼き尽くせるくらい火力はあるだろう。これなら、痛みも無く終わらせてやれる。

まあ、あたしも死ぬけどさ。

それはそれでいいかなって思うんだ。あのときからあたしは死に場所を探してたんだし。さやかと一緒に生きることが出来なかったけど、さやかのために死ぬのなら、それはそれで幸せかもしれない。

「さやか、一人ぼつちは寂しいよな。あたしも一緒に居てやるから」
本当は、あんたが人間のときに一緒に死んであげられたら、良かったのにな。

ごめんな。

紅い宝石が砕け散る。

全身の力が抜けて、首がぐんと横に傾いた。すつと目の前が真っ暗になる。意識が完全に無くなる直前、あたしの魔法が発動したのだろう。視界が真っ白になった。

世話、掛けたね。

さやか、そう言った気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0711t/>

人魚が見た碧 ムラサキの雲の その先へ

2011年5月7日03時40分発行